ISSN 1345-3580

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.15 No.11 November 2014

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

11

CONTENTS

- 巻頭言
  同性婚について（Ⅰ）
  ／深谷忠一 1
- 天理教教理史断章（86）
  近愛文書⑦
  ／安井幹夫 2
- 『教祖伝』探究（5）
  月日のやしろ
  ／深谷忠一 3
- 天理教伝道史の諸相（35）
  余聞２　名士や学者、他宗の信仰者だった初代会長
  ／早田一郎 4
- 「おふでさき」天理言語教学試論～「こと」的世界観への未来像～（7）
  第１章「もの」と「こと」の意味論⑤
  ／井上昭夫 5
- 「おふでさき」の有機的展開（31）
  第五号：第一首～第三十二首
  ／深谷耕治 6
- 新宗教のブラジル伝道（19）
  日本の新宗教の組織的展開③
  ／山田政信 7
- 「いのち」をつなぐ―生死の現象（35）
  「いのち」について⑥
  ／堀内みどり 8
- ノーマライゼーションへの道程（32）
  障害当事者性（デンマーク）
  ／八木三郎 9
- 東日本大震災と宗教（5）
  臨床宗教師
  ／澤井治郎 10
- 天理参考館所蔵の漢族資料（11）
  民間版画③
  ／中尾徳仁 11
- 図書紹介（87）
  『ニーバーとリベラリズム』
  ／澤井治郎 12
- English Summary 13
- おやさと研究所ニュース 14

天理教スタディーセミナー開催（深谷忠一）／天理大学が学部第 25 回海外公演報告（佐藤浩司）／「開講 20 周年記念・公開教学講座」のご案内

巻頭言

同性婚について（Ⅰ）

おやさと研究所長　深谷忠一　*Chuichi Fukaya*

５年ほど以前の話。当時カリフォルニア州バークレーの神学・大学院連合に留学していた息子が、“ここでは、友達の３割くらいはゲイ（同性愛者）で、牧師や先生にも少なからずいるよ”といってきたことがあります。しかし、その時は、「だから、お父さん、今時は自分の息子が『この人と結婚したい』と言って連れてきた相手が女の子だったら、それだけで一つの大きな選択をしているんやで…」という息子の言を聞いても、それはベイ・エリア（サンフランシスコ湾岸地方）という場所でのエピソードだとして、「それはよう分からんこっちゃ」と苦笑いした。

ところが、５年後の今夏、アメリカ伝道庁で開催された管内の教会長や教会後継者等を対象にした Study Seminar に出向いた際に、複数の受講者から、「同性婚についてどう考えればよいのか？」という質問を受けました。この問題が、ベイ・エリアの一部の人たちの話に留まらず、アメリカ各地の教会長さんたちも関心をもつほどオープンな話題になってきたということのようです。

さて、そこで、この問いに筆者がどう答えたかは次号で述べますが、この同性（愛）婚についての意見をいう時には、その視点・立場ということが先ず問題になります。例えば、死について語る時には、何人称の死としてとらえるかが問われますが、同性（愛）婚についても、一人称＝当事者の立場、二人称＝当事者の身内や近しい人の立場、三人称＝直接関わらない客観的な立場、そのいずれの立場に立つかによって、話の展開が大きく異なることに先ず注意する必要があります。

例えば、“同性婚などを認めていれば、子孫が途絶えて人類が滅亡する”などと言っている人でも、自分の子どもがカミングアウト（同性愛者である告白）をすれば、人類云々の話ではなくて、個々の人間・人生の問題として考えねばならなくなるということです。

さて、そこで、紙幅の都合で、途中の説明・議論（性の多様性、同性愛者の受難の歴史や現況等）を飛ばして、一人称的立場（筆者の周りには該当者はいないのであくまで想定ですが…）で同性婚について述べますと、同性婚は、性的指向が違う以外は異性婚と何ら変わることはない。つまり、自然に反する行為であるとは考えないということです。

例えば、世の中には、かなりふくよかな女性（男性）が好きだという男性（女性）がいます。しかし、その人に対して、“そんな相手を好きになるのはおかしい。人間は皆スラッとしたスタイルの人を好きになるべきだ”とか、“そんな太った人を好きになるのは病的だ。精神的や身体的にどこかに異常がある”、あるいは“それは、育った家庭環境や教育に問題がある”などとは言いません。その場合の「ふくよかな相手」という対象が同性者（男・女）と入れ替わるだけで、単に人の好みの違いに過ぎないというのが、まずは同性婚の一人称的な考え方だといえるでしょう。

これに対して世界・宗教界の対応は、先述の牧師まで同性愛者という状況から、見つかれば死刑という宗団（国）まで様々です。しかし、その中でも、徐々に法的に同性婚を認める国や地域（米国では州ごとに違う）などが増えてきており、本教内でも同性間の結婚についての意見が求められるようになっているのです。